

## 教師の授業力形成に関する動向：教師の持つネットワークに着目して

兼安, 章子  
九州大学大学院人間環境学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1563376>

---

出版情報：教育経営学研究紀要. 18, pp.79-84, 2016-01-23. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)  
教育経営学研究室/教育法制論研究室  
バージョン：  
権利関係：

# 教師の授業力形成に関する動向

## —教師の持つネットワークに着目して—

兼安 章子  
(九州大学／大学院生)

- I はじめに
- II フォーマルな研修の影響
- III ノンフォーマルな営み
- IV インフォーマルなネットワーク
- V おわりに

### I はじめに

本研究は、教師の授業力向上とネットワークに関係する研究動向を整理し、教師のネットワークと授業力形成に関する研究の到達点と今後の発展可能性を明らかにするものである。

学力向上が叫ばれる中、教師の授業力は子どもの学力を大きく左右するため、その向上が大きな課題であることは明確である。

また、教師の大量採用の時代を迎え、今後も増加する若手教師の授業力を向上させることは学校組織としての課題である。

元来、教師はOJTを主とした力量形成を行ってきた。1980年代以降、制度化されたフォーマルな研修によって、教師の力量形成を促そうとしてきた。2000年には、現職教師の大学院修学休業と10年経験者研修について教育公務員特例法改正が行われた。一方、法制度だけではなく、各都道府県の取り組みも強化されている。初任者研修などの法定研修だけでなく、教職大学院への進学、経過年に応じた研修や校内研修を推進している。

しかし、制度化された研修、子どもへの「指導」と位置づけられ増加する仕事、多忙により教師のプライベート化(油布 1988)も、進行しており、教師が持つつながり、ネットワークは希薄化してきているとも考えられる。日常の教職生活の中に在って教師たちの発達と力量形成を支え促してきたインフォーマルな“発達サポート機能”の形骸化が進行したとの指摘(山崎 2012)もある。同僚性を培うための試みも授業研究、学校研究など、研究活動や様々な研修を通して進められているが、毎年大幅に変わる職員構成や教員の世代間

ギャップなどもあり、学校での意思疎通や組織的な教育力の発揮が難しくなっている(佐久間 2007)。教師の仕事が増える一方で、勤務時間内の研修には限界があり、夜間や休日にも自主的に参加できる研修を企画する自治体もある。

一方、他の研究分野において、パーソナルネットワークへの関心が高まっている。爆発的流行現象を起こす口コミやSNSの力、コミュニティにおけるソーシャルキャピタル、児童虐待や無縁死を防ぐためのサートネットワークの在り方など、ウェブ上から現実社会まで、多様な領域で関係を改善、統制することで、現状打破や状況の改善ができないかと考える人々が増えてきている(安田、2011)。それに伴い、社会ネットワークや複雑ネットワークなどのネットワークへの注目がなされている。社会ネットワークとは、きわめて社会的に表現すれば、他者に向けられた社会的行為をベクトルとして、エージェント＝アクターの間社会相互行為の集成的結果として、リンク集合として形成される社会の動脈である(金光 2008)。複雑ネットワーク研究は、近年、物理学や情報工学、数学系の研究者が中心になって行っているネットワーク研究であり、社会ネットワークとは研究様式の差はあるものの、近年広い分野で応用されている概念である。

そこで、本稿は、教師のネットワークから、授業力形成の可能性を析出したい。教師が形成している教師同士のネットワークに着目し、そのネットワークをフォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルに分類し、整理する。

本稿におけるフォーマルなネットワークとは、法律上もしくは所属長の命令の下に行なわれる職

務や、研修におけるネットワークである。授業力形成に関係する研修について例をあげれば、管理職の指導助言や校内研修、都道府県教育委員会などが主催する研修、初任者研修、10年経験者研修、地域の研修会、長期派遣研修、教職大学院への進学などの影響によるものがある。また、ノンフォーマルなネットワークとは、教師がフォーマルな職務や研修とは別に勤務時間外に行う研修会、サークル活動などから形成されるものがあげられる。インフォーマルなネットワークとは、例えば、先輩教師や同僚の日常的なアドバイス、児童生徒との交流、保護者との交流、家庭生活などから形成されるものがあげられる。

## II フォーマルな研修の影響

### 1. 校内研修

日本で校内研修として行われている授業研究がレッススタディとして世界的に注目され、高い評価を得てきた(片山 2009)。

一方で、授業研究の定型化や硬直化などの問題(稲垣 1996)、一握りの教師の授業公開と授業反省会が行われているのみで、研修が形骸化している(佐藤・佐藤 2003)ことなども指摘されている。

また、村川(2005)はワークショップ型の研修方法を理論化し、授業研究へと活用している。浦野(2011)は、授業力向上をめざした校内研修において、協同して授業実践を語り合うワークショップ型校内研修、外部講師の活用が効果的であるとしている。校内研修は、小中学校の校内研修などにおいては、参加型やワークショップ型と言われるスタイルの協議が採用されるケースが増えている(木原 2004)。ワークショップ型の研修スタイルの導入の背景には、校内の教師同士のネットワークを繋ぐ役割が考えられる。

授業研究の成果について、秋田・佐藤(2006)は、直接的な教師の成長と、教師同士の関係変容により、学校の中に教師同士が学び合う関係が形成されることにあるとしている。また、研修会の満足度と授業研究の頻度、教師同士の授業に関する日常的な会話の量が相関を持っていること(秋田・佐藤、2006)も明らかになっており、教師同士のネットワークが強固なものになっていくことでの効果

が期待できると言えよう。

當山(2010)が優秀教員を対象にした調査によると、教育実践活動に密着する研修の評価が高いことから、教師からの評価も得られていると言えるだろう。加えて、當山(2010)は、相互に学び合う同僚性が校内研修の有効性を高めることを指摘している。

### 2. 校外研修

各自治体においては、教師の授業力形成のため、初任者研修や10年経験者研修などの経年研修だけでなく、様々な研修を主催し実施してきた。また、2007年に教育職員免許法及び教育公務員特例法の一部を改正に伴い、教員免許更新制の導入が行われるようになった。さらに、各自治体においては、現職教員対象の教師塾や教師道場などの自主的に申し込みし、参加する形の研修を実行している。

このような自治体主体の研修における、授業力向上に関する実態に関する研究は少ないが、自治体や教育センターの報告や、主催する大学等の調査(田上 2007)によると高い満足度であることが報告されている。一方で、教師へのアンケート調査による研究では、教師の感じる研修効果が薄いこと(吉田 2004 など)が明らかになっている。山崎(2012)によると、特に若手教師においては、研修に参加することで得られた人的ネットワークが力量形成に影響することが大きく、そのような面からも、校外研修がネットワーク形成に与える影響は少なからずあると言えるだろう。

## III ノンフォーマルな営み

### 1. 教科や職務別による研修

各教科での地域教師の研修会や、大学組織と連携した組織や教職員組合の地方組織において研修が行われ、その研修会を契機としてネットワーク形成の可能性がある。勤務時間外に公的な場所で行われるものもあり、現在まで、あまり研究がなされなかった。

當山(2010)の文部科学省の優秀教員を対象とした調査によると、職能開発の上で効果があった研修として、自主研修、校内研修、校外研修の順に

その評価が高く、自主研修の中でも、自主的組織・サークル活動における評価が高いことが明らかになった。

志水(2012)は、香川県の教科別自主研修会の充実に着目し、定期的な休日の開催と参加率の高さ、下部組織との連携、県内での統一された動きによる授業改善が学力にも影響を及ぼしていると考えている。

教科という枠組みではなく、職務という視点から、川上(2013)は、学校管理職の参加する研修とネットワークについて研究を行っている。校長会や教頭会によって、形成したネットワークを情報交換や相談のほか、教育政策に関する学校間での合意形成の場として機能させていたことや、日常的な情報交換が行われていたことを明らかにしている。そのネットワークの持つ作用の正・負の影響は、別途検討の余地があるとしながら、重要な意味を持つことを指摘している。このことから、教師の授業力形成に関する研修においても同様の状況が発生する可能性も今後、検討していく余地があると考えられる。

## 2. メンタリング

同僚間での教え合いや学び合いに関する研究として、近年、メンタリングが注目されている。メンタリングとは、経験を積んだ専門家が新参の専門家の自立を見守り、援助することを意味している(石川 2001)。複雑な問題に対し熟達教師が固定的な枠組みで指導するのではなく、初任教师と熟達教師が共に探求的なスタンスをとることが求められている(岩川 1994)。

メンタリングは、初任者を含む若手教師を対象に行われるケースが多い。教育実習生を対象にした研究(磯崎・磯崎・木原 2002)では、実習生と実習校の指導教官間において、効果的なメンタリングが行われていないことが指摘されている。しかし、メンタリングの可能性は大きく、メンターである熟達教師にとっても、教師の仕事の難しさや豊かさを見つめ直す機会になる(岩川 1994)。中谷(2007)は、初任教师が熟達教師から授業実践や日々の子供達への対応を学ぶことにより自分なりの実践的な指導力を身につけていくことを明らかにした。また木原(2004)は初任教师への先輩教師の授業活動等に関わる助言・指導プロセスがメ

ンタリングと位置づけられ、効果の大きいことが指摘している。

初任教师を対象に授業に関するメンタリングについては、(脇本・苅宿・八重・望月・酒井・中原 2010)初任教师が授業を行い、子どもの姿をもとにした授業の振り返りを行うことが有効であるとし、メンタリング支援システム FRICA<sup>(1)</sup>を開発した。システムの導入により、対話内容が授業技術や理論的なものを中心に、具体的な子どもの話がでてこない、熟達教師の子どもの話が初任教师に伝わらない、振り返る子どもに偏りが出るという問題が解決される効果が見られた。

小柳(2013)は、ミドルリーダーをメンターとし、教育実習生や若手教師を対象としたメンタリングについて、以下の点に言及している。1) 新任や若手教員に関わる雰囲気づくりを学校全体に作っていくために、授業を柱に研究を進めようとしていること、2) 新任や若手教員が当面ぶつかる課題や関心などを、1年の実践の時間軸に即して、また得意不得意などを互いに明確にし、チームで取り組むように位置付けていること(メンターが関わる内容として)、3) メンターがお世話役で終わらないように、若手・新任とメンターが互恵的な関係になる仕掛けや工夫を管理職が意識していることである。

メンタリングを制度化し、校内研修の一部として用い、若手教員の育成を行っている横浜市のメンターチームの取り組みなどもあり、今後も校内のネットワークを促進する役割としても拡大する可能性があるだろう。

## IV インフォーマルなネットワーク

### 1. 自主的な研修への参加

教師は自主研修を行政研修よりも高く評価している(久富 1995)。また、自主研修はライフコース研究(稲垣ら 1988、山崎 2002)においても教員の成長契機になっていることが証明されている。

しかし、自主研修の実態を明らかにした研究は少ない。ディップ・シャキヤ(2009)は、自主研修での教師の報告・討議内容の分析やインタビューを通して、授業に関する自主的なサークル活動が、参加した教師にとって意義があるものであるとし

た。民間の教育研究団体による研修において、学習指導の面で効果があり、地域の枠を超えた出会いや交流がネットワークの構築の機会となっている(當山 2010)。

## 2. 校内での出会い

徳舛・茂呂(2010)の小学校を対象に校内の相談相手について研究した結果によると、対象校では初任・若手段階の者が多くの相談相手を想定し、ベテラン段階の教師は相談相手として多く選択された。さらに行為、活動、共同体の決定権を持つかという立場の問題でもあり、主任等に集中していた。また、学年内や最上級生の担任にも集中しており、役割や役職といった立場を媒介に相談一被相談関係が成り立っていた。

山崎(2002)は、教師の成長を支えたものの上位に、学校内でのすぐれた先輩や指導者との出会いを挙げている。さらに山崎(2012)は、初任期の校内の先輩教師からの助言や、中堅教師が子どもたちとの交流における変化とともに、職場の人間関係が教育実践の質を高めることに影響しているとしている。教師が校内で出会うことにより、校内研修やメンタリングなどのシステムが確立されていない場合においても教員間のネットワークは形成されると考えられる。教師がインフォーマルな面での支えを必要としている実態(山崎 2012)からもその形成の促進が望まれる。

## V おわりに

本稿においては、教師の授業力形成に影響を及ぼすネットワークに着目し、その契機から先行研究の整理・分析を行った。

安田・石田(2001)によると相談ネットワークについては構成者の属性が、また情報交換ネットワークについてはネットワークの大きさが意識と強い関係をもつ。相談ネットワークについては現在の上司および部下という制度的に規定されたフォーマルな関係が占める割合が高いほど、情報交換ネットワークについてはネットワークの構成者数が多いほど、従業員は高い職場意識をもつとされている。そこで、本稿で取り上げた教師のネットワークに関する事象について、規模とフォーマル

な度合いについて図に示す。

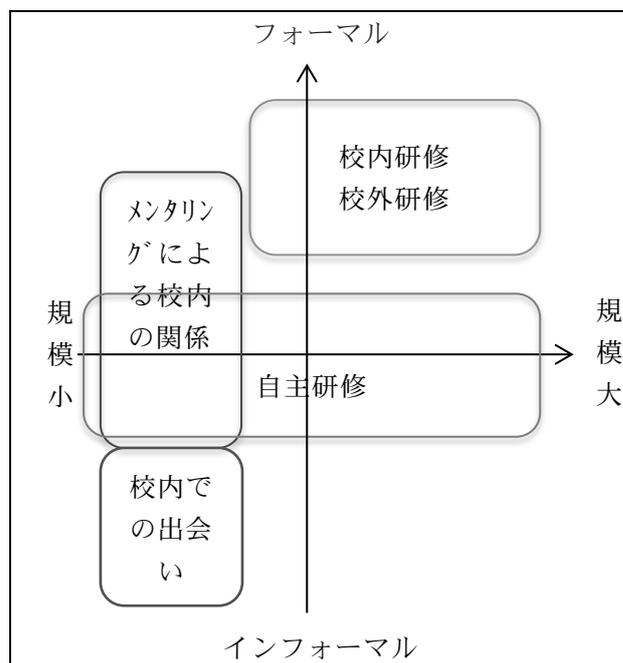


図 ネットワーク形成に影響を与える事象

インフォーマルな営みそのものから育まれるインフォーマルなネットワークだけでなく、フォーマル・ノンフォーマルな研修や営みを契機として育まれるネットワークについても、授業力形成に影響を与える。後にインフォーマルな関係性へと発展する可能性も含むものである。

インフォーマルな営みの中にこそ、授業力やその他の力量形成に影響を与える要因が多く含まれていることが明らかになっているが、そのインフォーマルな営みそのものを対象にした研究が少ない。その効果については一定の成果が認識されているものの、その内実については、明らかにされていない部分が多く、今後の課題である。

また、実際に授業力がどのように形成されたのかという検討のないまま、教師同士のやりとりやその影響についての教師の評価などが分析されており、授業力形成プロセスとの関係性や影響の検討についても今後、研究が必要であろう。

### 【注】

- (1)メンタリング支援システム FRICA(フリカ)とは、授業で別の教師が子どもの撮影を行い、

授業後に振り返りでその映像を視聴しながら対話を行えるシステムである。タブレットPCで子どもを焦点化して撮影することができ、授業後には時系列、対象の子ども別にも映像を視聴することができる。

#### 【引用・参考文献】

- ・ 秋田喜代美、佐藤学『新しい時代の教職入門』有斐閣、2006年。
- ・ 石川治久・河村美穂「中堅教師のメンタリング」『教育方法学研究』第27巻、2001年、91-101頁。
- ・ 稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1998年。
- ・ 岩川直樹「教職におけるメンタリング」稲垣忠彦、久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会、1994年、97-107頁。
- ・ 浦野弘「公立中学校におけるワークショップ型校内研修を核にした授業力向上の取組—学校改善プランに即した一年間の実践を通して—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究』33号、2011年、111-121頁。
- ・ 小柳和喜雄「メンターを活用した若手支援の効果的な組織的取組の要素分析」『奈良教育大学教育実践開発研究センター』22巻、2013年、157-161頁。
- ・ 片山宗二「授業研究の現在」日本教育方法学会編『日本の授業研究 Lesson Study in Japan 授業研究の歴史と教師教育〈上巻〉』学文社、2009年。
- ・ 川上康彦『公立学校の教員人事システム』学術出版、2013年、191-213頁。
- ・ 木原俊行『研究授業の実施と結果の活用』「[学習指導・評価] 実践チェックリスト」、教育開発研究所、2004年。
- ・ 金光淳「社会ネットワーク分析は『複雑ネットワーク』をどう扱うか？ブランド・パワーの多モード・モデル」『オペレーションズリサーチ』第53号、日本オペレーションズリサーチ学会、2008年、523-528頁。
- ・ 久富善之『教員文化の社会学的研究』多賀出版、1995年。
- ・ 佐久間亜紀「学びあい育ちあう教師集団と同僚性」『学校運営』49巻、学校運営研究会、2007年、16-19頁。
- ・ 佐藤雅彰・佐藤学『公立学校の挑戦—授業を変える学校が変わる』ぎょうせい、2003年。
- ・ 志水宏吉・高田一宏『学力政策の比較社会学国内篇全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』明石書籍、2012年。
- ・ ディップ シャキヤ「教員の自主研修活動の社会学的一考察：事例研究対象の教師文化的側面から」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』61号、2009年、99-100頁。
- ・ 田上哲「大学が取り組む現職教員研修に関する研究—香川大学研修講座の研修参加教員へのアンケート調査より—」『香川大学教育実践総合研究』15号、2007年、19-32頁。
- ・ 當山清実「『優秀教員』の職能開発における現職研修の効果に関する研修—校内研修に対する公開式を基にして—」、『教育実践学論集』11号、2010年、51-62頁。
- ・ 當山清実「『優秀教員』職能開発における自主研修の効果」『日本教師教育学会年報』19号、2010年、101-111頁。
- ・ 徳舛克幸、茂呂雄二「小学校教師間ネットワーク分析：相談・被相談関係からネットワークを捉える」『筑波大学心理学研究』39号、2010年、1-9頁。
- ・ 中谷素之『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり 動機づけの教育心理学』金子書房、2007年。
- ・ 永田智子・鈴木真理子「ネットワーク環境におけるレッスン・スタディ構想—米国のLesson Study 研究をもとに—」『滋賀大学教育学部紀要教育科学』55号、2005年、135-141頁。
- ・ 村川雅弘『ワークショップ型研修のすすめ—授業にいかす教師がいきる』ぎょうせい、2005年。
- ・ 安田雪『パーソナルネットワーク—人のつながりがもたらすもの』新曜社、2011年。
- ・ 安田雪・石田光規「相談と情報交換—パーソナルネットワークの機能」『社会学評論』51号、2001年、104-119頁。
- ・ 山崎準二『教師のライフコース研究』創風社、2002年。

- ・ 山崎準二『教師の発達と力量形成一統・教師のライフコース研究一』創風社、2012年、450-455頁。
- ・ 油布佐和子「教師集団の実証的研究」久富善之編『教員文化の社会学的研究』多賀出版、1988年、147-207頁。
- ・ 磯崎哲夫・磯崎尚子・木原成一郎「教育実習に対する国立大学附属学校指導教官と教育実習生の意識調査：教育実習におけるメンタリングの可能性を探る」『日本教科教育学会誌』25巻2号、2002年、21-30頁。
- ・ 吉田和子「教育現場の実態と行政研修の課題：教師の『多忙感』への考察を軸として」『岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究』6号、2004年、175-190頁。
- ・ 脇本健弘・苅宿俊文・八重樫文・望月俊男・酒井俊典・中原淳「初任教师メンタリング支援システムFRICAの開発」『日本教育工学会論文誌』33号、2010年、209-218頁。